

風ノ部		適	否
北風	風向ハ左右90度以内ヲ正中トシ、180度以内ヲ偏中トシ、其以外ヲ不中トス		
北東風			
東風			
南東風			
南風			
南西風			
西風			
北西風			
風向不定			

時ニ風力ノ強キヲ予報スルヲ得ル場合ニハ臨時予報スルモ妨ゲナシ
風力ハ強風以上ノ日ニ限り予報果シテ強暴風吹キタルトキハ正中、吹カザルトキハ不中トス

温度ノ部		適	否
温度昇ル	温度ハ必ズシモ毎日予報スルヲ要セズ特ニ前日ヨリ昇降ノ烈シカルベキ場合ニ予報スルモノトス而シテ昇ルト予報シテ降ルトキハ不中、降ルト予報シテ昇ルトキ亦不中、其他ハ正中トス若シ昇降ナキトキハ之ヲ偏中トス		
温度降ル			

種別	月	明治 24					明治 25							一周年平均
		8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	
天気		67	71	67	70	60	70	66	73	67	65	73	72	68.2
風向		68	53	43	56	52	65	60	50	58	57	66	84	59.0

これをみると成績はあまりよくなかったことがわかる。根室のこの報文には暴風警報についての適中についても掲載されているが、それは最大90、最小81、平均84(明治22~27年)で、暴風警報はかなりよく適中していたことがわかる。

(根本 順吉)

8. 芙蓉日記(抄)

「芙蓉日記」は野中夫妻が明治28年12月富士山を下りてから野中千代子が執筆し、翌29年1月7日より2月1日にかけて17回にわたり当時の新聞に掲載された。

内容は野中 至が山頂観測の準備を決意するあたりから始まり、千代子が琴子(野中の一女)を福岡の実家にあずけて登山を敢行、至を助けて観測する詳細を語り、病のためついに下山するくだりに及ぶもので、約100枚の大作である。ここには紙面の関係もあり、山頂生活から下山までを抄出した。

山上はさなきだに逆上して常に頭痛を覚ゆるなるに、

これにつづいて天気、風向、温度の適否を監査する次のような様式がかかげてある。

目次	天気			風向			温度		
	予報	実況	適否	予報	実況	適否	予報	実況	適否

この表の脚注として、採点上の注意が次のように示されている。

(+)ヲ正中トシ(出)ヲ偏中トシ(-)ヲ不中トス。百分比例ヲ作ルトキハ偏中ノ数ヲ折半シ一半ハ正中ノ数ニ加へ一半ノ不中ノ数ニ加へ以テ割合ヲ出スモノトス。二人以上予報スル所ニ於テハ日次ノ次ニ氏名ノ一欄ヲ設ケ姓名ヲ記入スベシ而シテ各人別ノ別表ヲ附スルヲ要ス。

以上の方法によって根室で実施した明治24年8月より、25年7月までの予報を採点した結果、正中の割合は次表の通りになっている。

己夜もすがら文したためし為にやありけん咽喉の内に腫れもの出来て食物は更なり物言ふ事さえ叶はねば、痛みに堪えかね7日余りも打臥してありけるが、良人はいたく御心をなやまし給ひ、日頃心遣ひせし身に悩日数を重ねぬるはいかゞあらん。まして此の地は万くるひ勝ちなればげに氣遣はしくこそあれ。何れ吾には捧ぐる身なれば思ひ切つて潰してんとて、やがて三つ目ぎりを研ぎすまし口中にさし入れ、腫れ物を只一つきにし給ひしに、神の御助けにやありけん、日ましに痛み怠りぬるぞ有難き。また夜をこめし窓のすげききらきらとさし入るかげに驚かされて、枕もたぐれば、今日は霜月三日ぞかし。げに人里もなき此の山さえさすがに御国の祝日とて、常には似もやらで冬空乍ら四方の景色心もおのづから長閑けくぞ覚ゆる。今は半仙女となりぬる吾身ながら下界の慾は失せやらず、いざとく朝きよめして祝のもの調へ大御代を寿きまつらんとて、ささやかなる鍋に餅米うるほしたるを炊ぎ、やがて吹竹もて搗きなどしつ。果てはネヂ廻しと云ふものの太やかなるものもてひたすらこねたれども、あやしげなるものゝ出来て口に入らざりければ、

かたへにかい遣りつつ、力なく粥をすすりてやみにき。
良人は御国旗を取り出給ひて、

けふこそは御代の祝ひの時なれや

いざ御旗をば打ち揚げぬべし

屋のむねと同じ高さなる後手の風力台のもところそ名に
負う日の本第一の高き処とは見えし。今身は天上にあり
とてもいでや寿き奉らんとて、窓の戸こじ放ちていざり
いで、やがて風力台のもとに御旗打揚げんとするに烈し
き風は情なくもあはや吹き去らんとて手を放す事だに
叶わず。今は力なしとて懐に巻き入れ、唯二人ここに跪
き東に向ひて御所を拝し奉り、扱もかゝる高き所より下
伏して拝む事のかしこき許させ奉へと祈りつゝ、今しも
東西におはす父母にもかれと、あなたこなたの天を見る
が内に、早風一叢の雲を誘ひ来て今迄烈しかりつる風は
弥増しに強く、蹴立つる吹雪はつぶてを投打つが如く、
いやが上に重なれる巖の頂きを掠めて飛び来る雪と共に
岩根をゆすり、乱るゝ吹雪は時ならぬ落花となりて、轟
く音喩へん方なし。さる折に己はしなく2、3間が程吹
き飛ばされたれば良人の

おなじみの風の御神はけふはなど

山の神をば吹き飛ばしけん

己はいたう胸つぶれて言ひ出ぬべき言の葉だにあら
ず。よろめく足をふみしめつゝ、石だたみに縫り、窓の
内に吹き込まれていざり入りぬ。良人の

祝ひ日の餅どころではなくやと粥

すゝりし上に風くらひけり

頂は如何に晴れたる日にも風強ふして烟突の口を吹
き掠る音汽車の笛の如く、雪塊を捲き上げ、巖の角を打
ち来る響怒濤の岸をうつに等し。深夜観測の時等凄まじ
くも又恐し。かかる様なれば耳は綿もて塞ぎたれども良
人も己も鼻の内口のあたりは裂け破れて、血潮漏れ出で
朝な朝ないたう痛みを覚えぬ。されどこは逆上の為にや
あるらん、馴れ行きなば果ては治る事もあらんと思ひし
も下山の時まで少しも癒えざりし。(中略)

10月末つかたより室のはめ板のうち側屋根の裏板など
しうしうと凍りて霜の降りたるが如くなりたれば、まし
て水分のある程のものなべて凍らざるなし。砂糖もばら
ばらとなりて甘味少く梅干もからからとして酸味薄し。
暖炉とてもいと強うもさゝれば其外側さへ暖まらず、か
しぎたる粥暖炉の側におくだに一時計りにして氷とな
り、火箸をさへ立るに由なし。まして飲み物の類皆打ち
こはちて用ゆるは中々に楽しげにも覚ゆめり。かかる様
なれば炭、薪、砂糖、梅干其外品々思ひの外に使い越
し、日増しに心細くはなりゆくとも、炭まき等は心の促

に使はざればかた時と過し難く、誠に心苦しき事にな
ん。湿球寒暖計の球を湿ほさんとして氷をとかして刷毛に
ひたしたるを誤ってそばなる鉄器に触れたるに吸付くか
と覚ゆる程凍りつき、引けども少しも動かんとせず、
真にせんすべもなければそのまま毛をちぎりて、良人
の

慾ばりてやかん頭の刷毛おやぢ

金に付いたらとてもはなれず

飲水を作らんとて外の面に氷をとらんと入口の戸を開
かんも凍り閉じて引き明くべきようもなし。いでや煮湯
をそそぎてと、二とき計りも炊ぎやうやう煮え立たせ、
戸口の敷居に流したれどまだ灌ぎも終らざるに湯もきら
きらと氷になりいよいよ堅く閉じつきぬ。かくてはせん
方なしと力の極み脇窓の硝子を内べに引き放ち辛ふじて
此所より這ひ出づれば、はやもすそは髪の上に吹き上げ
られぬ。いつも外面はかかる風にいたづらせられてその
姿のあやしげなる。わきて女には恐しくて恥かし。あた
りに人目なければこそ。岩角のつらゝ下向きにたれもせ
で、風のむきのまにまに横様に岩角にすがり、或時は空
に向い立揃ひたる様実に剣の山もかくやあらんと思えて
恐しうなん。なべて頂上は空に向ひ風吹く事多ければか
くあるぞかし。いかに晴れたる日も風強からぬ時なけれ
ば空に雲なき日にも常に積れる雪を捲き上げ、釘穴程
なる隙より吹雪乱れ入り、観測室より物置き土間のあ
たり、一面に雪積りて白妙となれども、こは二六時中乱
れ入るからに、防がんとするも後には気根尽き果てせん
すべもなし。よしや紙帳をつくりてと、其の裾に2斤計
りもありなん鐘詰二ツ三ツを置き押へたれども紙は帆の
孕みたるが如く隙間風に吹かれ鐘は覆へりて逃ぎぬ。さ
らばとてその内に毛布をたれ置くと猶吹き通して、肌
を寒しと言わんより痛しと言ふばかりなり。たれこめ
し毛布に昼の間とても小暗らければ燈火を消す時もな
し。げに常闇の世とはかくやらんと覚ゆめり。されど申
すもかしこき後事なれども皇子の鎌倉なる土窟に御座ま
しましゝ御事など思ひ比べなば賤の身としてかかる住居
はものゝ数にてもあらじ。

11月5日の頃より妾手足はれむくみ20日ばかりには目
もふさがりにき。良人は一しほ心を尽し給ひ飯米をやめ
葛粉とあづきに砂糖をまぜて用ひ続けしは、月の末頃
には漸々快くなりぬ。良人もおのれも初めの程は3度の食
事をなしつゝありたれども神無月の末つかたよりは胃腸
弱りて咽喉に下らず、粥2碗宛朝夕2度の食餌となし、
肉類の鐘詰等は見るだに胸ふくれぬ。

12月12日午前の頃にやありけん。窓の外面に声高く
「野中さん治って居るか死んで居るか、野中さん野中さ

ん。」と呼ぶものあり、是より先良人は氷を取るに不便なりとて戸の敷居を削り取り給ひしかば、幸なりとそこより戸を内へに引きはなし迎へ入れしに、1人は中畑の勝又熊吉ぬし今1人は妾の得知らぬ人にてありき。やがて土間迄誘ひしに、そは王穂村村会議員にてまします勝又恵造ぬしとか承りぬ。さてくさくさの御詞も終り恵造ぬしは良人に向ひ給ひ君が登山を送る宴を開し時僕冬季に登山し君を訪ね参らせんと誓し事の忘れ難くて、去る11月30日御厨警察署長筑紫警部君巡査平岡鐘次郎君其他菱本與吉郎君剛力西藤鶴吉ここのなる勝又熊吉うじおよび僕れと打連れ登山せしかども、調度足らざりし為果さずして五合目より下山しぬ。されどその促止みなん事の口惜しさに今度思ひ立ち、我等2人その外御舎弟清君平岡君鶴吉諸供登山せしに、風荒くして3人は今八合目に止り吾等2人辛うじて辿り着きぬ。君たちへの贈り物山下には数々侍れども負い登るに由なく、唯京なる父御と八合目なる清君との御文贈り物その他遠ち近ちよりの書状のみを持ち来りぬ。又熊吉ぬしが着たる衣は平次娘つる子が己に贈りしものとてぬぎとりて、共に良人に参らせ給ひ、さて2人共さも悲しげなる御顔に涙を浮べ、我々たまたま訪ひ来しにも苦しみの限りなるに君達久々の山籠りさこそつらしと思ひ給ふらめ。さても御身に病はおはさずやと問ひ給う。良人はつらさの程はかねて覚悟にや侍れども折々は忍耐袋の緒や絶えなんと思ふ事なきに侍らす。されども御国の為の5文字を常々目の前にぶら下げ兎角して辛抱するの覚悟に侍る。又病の事は見給ふ如くはれたれども今は漸く快き方なれば御心安く思召せと云ひ給ひしに、ややありて恵造ぬしはかかる御いたつきあるからは一旦下山して病を治め給へと宣へども、良人は君の御志は嬉しけれども吾今此の業を止めなば誰か又之を継ぐべきものぞ。死は素より覚悟にて侍る。まして病ありとて下山する事や候べき。命も宝も捨て果てたる吾今更思ひ置く事もなし。不幸にして命絶えなんには唯天命とあきらむべしと宣ふ。恵造ぬしは病の為死を急がるゝはよも君の御本意にはあらじとおほせ、せちに下山を勧め給へども、つまは素より死を望むには侍らねども僕自ら思ふに未死すべき容体には候はず。など仰せて少しもうけ引き給はざりければ、2人の方は何の詞もおはしまさずして男泣きに泣き給ひぬ。(中略)

師走の初めつかたより良人は漸々にいたつき給ひて、妾が如く腫れ給ひぬ。されども物難き御事なれば、12回の観測は休らふこともなくさせ給ひしが、月の半の頃には早や10足斗りつゝ休らい給ひでは観測室まで行かせ給ふ事なり難し。今は例の小豆はやなくなりたれば葛粉

のみを進めつつ漸々腫れは少なうなり給ひぬれど葛粉砂糖とも今は僅に1日分を残すのみにて購ひ求むべきよすがもなし。されども粥を参らせなば腫れや参らん、如何にせんと思ひ煩らひしに和田大人の御文に年の暮には登山する事もありなんとありしかば、良人はその登山の時にこそ種々此の後に不足のもの送られんやう中畑の佐藤夫婦に頼みやりてん、さればその品残りなく書き認めよ仰せられければ、妾インキを暖炉に暖め、小豆砂糖梅干密柑干温飩共外数々書き連ねぬ。されどもかゝる所とて和田大人の訪ひ給はん事も確ならず。唯はかなき頼みを力にて、よしや饑に死するともなど戯れ給ひつつ日数つもりて早や此の月も二十日あまり一日になりぬ。此の日はなき祖父様の御命日にあらせ給へば、心ばかりの法事をなさばやとて、良人は御戒名三友軒閑哉大居士として正面の壁に張りつけ、氷等捧げ給ひければ妾麩の露物など備へつつ、良人と唯2人御前にひれ伏す。所がらとて捧ぐべき供物もなし。唯心ばかりを受けさせ給へと伏拝みつゝありける折ふし窓のかた風の音に打ちつれて人の声す。こは夢かと許り思ひしが、よくよく聞けば御殿場から参りましたと言ひ乍ら人々4人ばかり戸口のかたに來られぬ。扱人々申さるゝよう御訪れの為和田殿外数多の人々けふ登山ありしが、和田殿達は八合目に宿り給ひ、吾等4人かけぬけてたどりつき頂上の室は雪に埋もれしを掻きひらき、飯を炊ぎ火に暖りたれば此所にて御馳走を煩わすまでもなし。すぐに八合目に帰り、明日は和田殿達と打つれて再び訪ひ参らせんと云ひ捨て、妾が引留むるを耳にもせではや諸共に下り給ひぬ。

明くれば22日良人は和田大人の来り給はぬ先にと忙はしく病の床を去り給ひしが早や正午も過ぎなんと覚しき頃和田筑紫平岡の御方々は畏くも上の仰を承はり、わざわざこゝに臨み給ひしよし、さればその御事供を拙き筆もて書きつらねんは公に対しかしこければこゝに記さず。唯和田大人と良人との御かたらひ中共に御涙を流し御声も曇りがちなるかと思へば、又或は御目をはり御声をば励し給ひしが、良人はたやすく下山しなば高層観測の事此れより廃れなん事を歎き給ひけれども、和田大人は有志の告に違はず見受くる所君の容体決して尋常にあらず、先つ頃見し面影は失せ果てゝ、実に異人を見る心地ぞする。君後の事ども思はゞ今ぞ下るべき時なるべし。君は僕に別れし時までも命危しと見るならばころがりてなりとも下りて死なぬ工夫をなさなん。是れぞ後の図りをなさん為なり。ゆめ卑怯ものよとそしり給ひそと言ひしに非ずやと宣ひしに、良人は仰はざる御事なれども僕れの病はいまだ旦夕に死に絶へなん容態とも思ひ侍らず。唯御芳志は返すがえすも嬉しくぞ覚え侍る。願く

は此の病を治むべき薬餌を賜はらば静に心を養ひ目的を達したうこそと宣ふ。

和田大人は君の氣象あるには左も思ふ可けれど、豪気と身体とは伴ふものならず。僕れ君の病体を見るに身体耐えうべしとは認め得ず、抑々今度僕登山せしは一己の和田に非ず、技師和田雄治官命を帯び、此所なる筑紫警部平岡両君も又同じく官命によりて此の地に臨みぬるものなれば、君如何に拒むとも、一旦是非に下山せざれば止まじ。此所に父君勝良君弟御清君よりの信書を携へたれども君が決答の旨によりては之を示すも示さざるも僕れが心の侷なりなど宣ふ。良人は官命と承り、此の上拒み申さんは恐あり。今はせん方もなし。さりながら必定君達上の仰を承りて登山せられしならばよもその証拠のなき事は候まじと云ひ出で給ひしに筑紫平岡の方々はいたく思ひ当らせ玉ふやうにて実にそのしるしを持ち来らざりしは心なき事なりし。と宣ひし、和田大人はいたく憤らせ給ふやうにて、至君は只ならぬ仲なるに今更僕を疑ふか。かゝる折ふし証拠を示すの要あらじ。君は僕を疑ふかとせき立ち給へば、良人はいやとよ疑ひ申すに侍らねども、先づ御心を静めて僕の心中を察し給え、此の度下山の事は僕の身に取り誠にたやすき事に侍らず。その故は僕は世人に対し越年を契りて登山せしものなるに、今微恙の爲とて下山せん事世人に対し又斯道に対しいと心安からず侍れば思はずもかゝる過言せしにこそおもはゆれ。今は強ち証拠を見んと願ふには侍らず。されども僕が願ふ所は将来大きやかなる帝国観象台を建てん事にぞある。されば此の事だに確め得なば、今屠腹して此所に死するも更に憾を遺す事は候はず。今僕下山しなば、世人は富士の越年は及びなき望にて、なし難き業よとあやまり信じ、終には後には建設けなん事のさはりとなりもやせんと思へば、誠に氣遣はしき限りにこそ。こは君如何になし給ふぞ如何に如何にと言ひ給ひ、此の後大きやかなる観測所を建設せん事をも押し返し押し返し確め合ひし後始めて下山の仰せをかしこみ給ひぬ。誠に互の御詞ことわり極り、なさけ尽し聞え侍れば、そばに聞き居る妾はさらなり、警部巡查の御方々扱は熊吉鶴吉までも始終感涙を止め得ず。扱て良人はいよいよ一と先づ下山し給ふ事となりしかば和田大人は漸く御心安くならせ給ふやうにて観測室の側に行き給ひし時妾追ひ行き参らせ、扱もこの7歳ばかり良人は事業に心を砕きつるに今下山せん事さこそ残念ならぬ。今しばし此の侷に良人の望みを遂げさせ玉へと願ひしに、和田大人は御声あらく、いかに女なればとて弁なきも程こそあれ。余はその氣丈なるには感ずれども、今あの病体を見られずや。かゝるありさまにて今しばし滞山せれば命にか

からん事疑ふかたもなし。万の試験観測ともに今日までにてはや十分なるべし。若しやあやまちありなんには忠は反て不忠とならんと言ひ放ち給へば、妾覚え打伏して涙の限り泣き沈み、あゝ良人にかゝる病あり神も仏もなき世かと心の内に打歎きぬ。

兎かくするうち思ひの外に時をうつしたれば空かわらぬ先にいざとくとくと和田大人始めせき立ち給へば、良人は病みつかれ給ひ、妾も病後弱りたる事とて、甲斐なくも剛力の背なに扶けのせられ、やをら観測所を立ち出でんとす。数ふれば、こゝにありて風雪をしのぐ事早や三月になりぬ。流石に名残の惜しまるゝ為去り難くて良人の

梓弓やがて帰らんわれならば

ひさ別るとなおもひたがへそ

良人の爲には命も惜しからじとかねて心を尽しける彼の熊吉ぬし良人を負ひ参らせ、己も深く毛布に包まれて鶴吉ぬしに負はれ、辿り辿り下らんとす。折ふし絶間もなく内院より吹き来る吹雪いと烈しきに背負ふ人々飛ばされじと仁王立ちに立ちたりけるを左右より4、5人して扶けつゝ力を合せやうやう銀明水のほとりに出ぬ。ここより下は胸つき、次ぎは大だるみにて何れも名に負ふ難所なれば、夏さへつらき山路、まして今は雪氷に埋もれて何処を下るべきやも見へわかず。されば1人は此の通りこそ雪梢、軟らかなれば足のとまりも有るべけれここよりこそと言うに、いないな彼の岩の上を辿らんこそ中々に安かりなんなど、人々御心を尽し給ひつる事の嬉しさ世にたとふべきものもなし。

かくて胸つきも早や半ば過ぎつらんと思ふ頃良人は此朝まで病の床に打ち伏し給ひしを俄に負ひ参らせて胸を抑へたる上肌もさくるばかりなる寒風吹雪を巻立て、真向より吹き荒し為弱り果てたる身には息つく事も得やすからず、胸いと苦しとて悶え苦しみ給ふ程に迎の方々必死となり給ひ急を八合目なる方々に申し、力を合はせて室の中に助け入れ給ひし時は良人ははだへ冷え渡り、両眼を閉じ息も絶へだへなりければ、和田大人は申すも更なり、筑紫平岡某その外の方々夜もすがら懐炉もて良人を暖め給ひける程に、真夜中の頃やや人心付き給ひしかば、御方々も始めて安堵の思ひをなし給ふ。己は良人よりも半町余り先立ちてうち立ちたるまゝ途中の有様わきまへずして室の中に打臥してありけるが、程もなく方々の息まき給へる内にも何となう打ちしめりて、声さへ得あげず、臆て良人をば引ずるが如く炉の傍にかきおろし給ひぬと思ふ中に己が後手にどうと打倒れたる音して声立てぬばかりに泣く人あり、驚きてふり向けば鬼をも取りひしぐべきかの熊吉ぬしにぞありける。此の時己は

早良人は事はて給ひぬるか、いたう胸つぶれて今より思ひ廻すだに身の毛もよだつ心地するぞかし。後に良人はげにわれもその時こそ富士の鬼となりつるよと思ひ定めたりしと仰せにき。

和田大人の己にとく帽子手袋等を賜り、何くれと御心を尽させ玉ひ又負ひたる剛力の氷に迂り風に倒れん、之あればとて夫々に介抱の人をそへ置かれしなど御心やり残る方もなかりしは真に有難かりし事になん。

(野中千代子)

9. 故山階宮殿下御逸事輯録

故山階菊麿王殿下が金糸玉条の御身を以て、軍国の事に尽させらるる傍ら、學術殊に気象学を勤奨遊ばされしことは、国民の感銘する所にして、畏多くも科学王の名を擬し奉りし程なり、其御事蹟は既に世間に知られし所なり、余は謹んで御他界近況の一端を記して蘭折玉砕の故殿下を偲び奉るの資とす。

殿下病褥に在らせらるるの時、1日若宮に御物語りあらせられ「武彦も成人の後御父様の様に器械や気象天文の如きことを研究するがよい実に面白きものである」と御仰せあられしことありと承る、其後日ならずして御病革まり其御言の葉は御遺言となるの不幸に至れりと、殿下の御心を注がせ賜ひし程こそ察し奉り畏多きことどもなれ。

御最終迄天気図を御覧相成り、4月28日も御待受け御覧相成りたる由に承はる、25.6.7日の如き既に御披かせらるる御力さへもあらせられず、兩名の侍女左右より御捧げ御覧に入れたるに、表裏共詳細御覧あらせらるること暫くなりしと、(御病中天気図御覧用の挾具も出来て居り御病褥の中にて御使用ありし)28日は御病勢大に進み同日の天気図出来するの前、既に昏睡に陥らせられたるを以て、明治41年4月27日の天気図こそ御永訣の紀念とも申すべきものなれ。

殿下は独逸御留学中自記晴雨計御買上に相成り、爾後20年近くも常に御居間に据付け其記録を御注視させらるるに、非常の興味を感ぜられしが御臨終の後迄も継続自記しつつあり、且つ外に「リシャル」製眼醒時計状の毛髪検湿度1個は常に御側に在りしやに承はる、最近の御研究は地中温度の観測にして仏国より地面下1米の温度を自記する寒暖計(現に中央气象台塔内に保存す)を御買上げになり、御庭先きに据付け遊ばされ、其傍には普通の地中寒暖計を備へられ、余等の筑波山頂に於て鉄管式と木函式との観測に関する成積と、比較研究されん御心組あらせられしやに承はる。

御生前の御事斯くあらせられしかば、薨去遊ばされし

後近侍の者御心状を恐察し奉り自記晴雨計の記録、地中温度の記録及び最近の天気図1束を特に御肌近くに納めたりしと云ふ、清浄潔白素絹の外他一物御身邊に添へられざる其靈柩に、天気図と自記紙とが他界の御伴侶たる光榮を負ひ得しは、殿下の御熱心の程を表象するに余りありと云ふべし。吁実に殿下の御心を慰め奉るべきもの只此片々あるのみ又香川家令に聞く御召物よりも寒暖計の1本でも買ひたいと云ふ御気質にあらせられ、御手許金何程位の残余あるやと御尋ね相成るにより、筑波山観測所の経費も年々嵩みまして、斯々斯々不足し居る位で御座りますと御答へすれば一時御止めになるも、御召物御新調の事など言上すると、夫れでは何々の器械を注文し呉れよとの事仰出さるること度々にして、先頃も各種の器械を仏国に御注文になりたる次第なりしと御熱心の程恐入る奉る処なり。

殿下御自身に斯く御心を注がせらるるより、御殿内家職の者皆々気象の事に注意するは勿論なるが、本年初めより自記晴雨計用紙の取替を若宮殿下に御指図遊ばされ後日御研究の端緒を開かせられ居りしと承はる、又奥御殿内に於ても婦人ながら皆々殿下の御薫陶に依り、数ヶ所に寒暖計を掛けて観測の手真似をなしつつありしと申す、今や溘然御他界遊ばさる悲哀の涙に咽びながら奥の婦人孰れもあれ程御熱心遊ばされたる観測の事業は是非とも益々盛大にして御供養すべきものなりと言ひ居らるる位にて御遺徳の致す所と申す外なし、余任地に帰るの前日御庭先きに据付ありし自記地中寒暖計を取蔵めつつありしが、御遺物中特に御着手中の者にもありて窺ひ見る者歎歎せざるなし、暗涙に咽びつつ漸くにして其業を終りぬ。只今御殿内には「ダインス」式風圧計が非常に高く据付けあると、風力計及び御手製の風信器等は外部よりも窺はるる、又曾て無線電信の原理を応用して電雷の記録器を御工夫あらせられたることあり、其外御殿内に在る重なる器械は、

リシャル形風力計	地動計
同自記地中寒暖計	御自製自記風力計
同自記湿度計	御自製自記風信器
同自記晴雨計	計算器械
同毛髪湿度計	抵抗箱
ベクレー形風信器	アンペアメートル
リシャル形自記風力計	垂直分風力計

其他乾湿球寒暖計各種の寒暖計等にして、海内外各所より寄進の気象報告類は御分類になりて御書棚に御備へになり、一部分は筑波の方に御廻附あらせらるることになり居たり、今は孰れも御遺物となりぬるこそ悲しけれ。